



いばらきの
山とまちを
つなぐ



ムービーはこちらから。

発行：茨木市 平成29年（2017年）3月

編集：茨木市北部エリアの魅力づくりを推進するネットワーク会議

監修：大阪府府民文化部都市魅力創造局文化・スポーツ課、大阪府立江之子島文化芸術創造センター

本冊子は大阪府の「プラットフォーム形成支援事業」を活用して作成しています。



茨木市

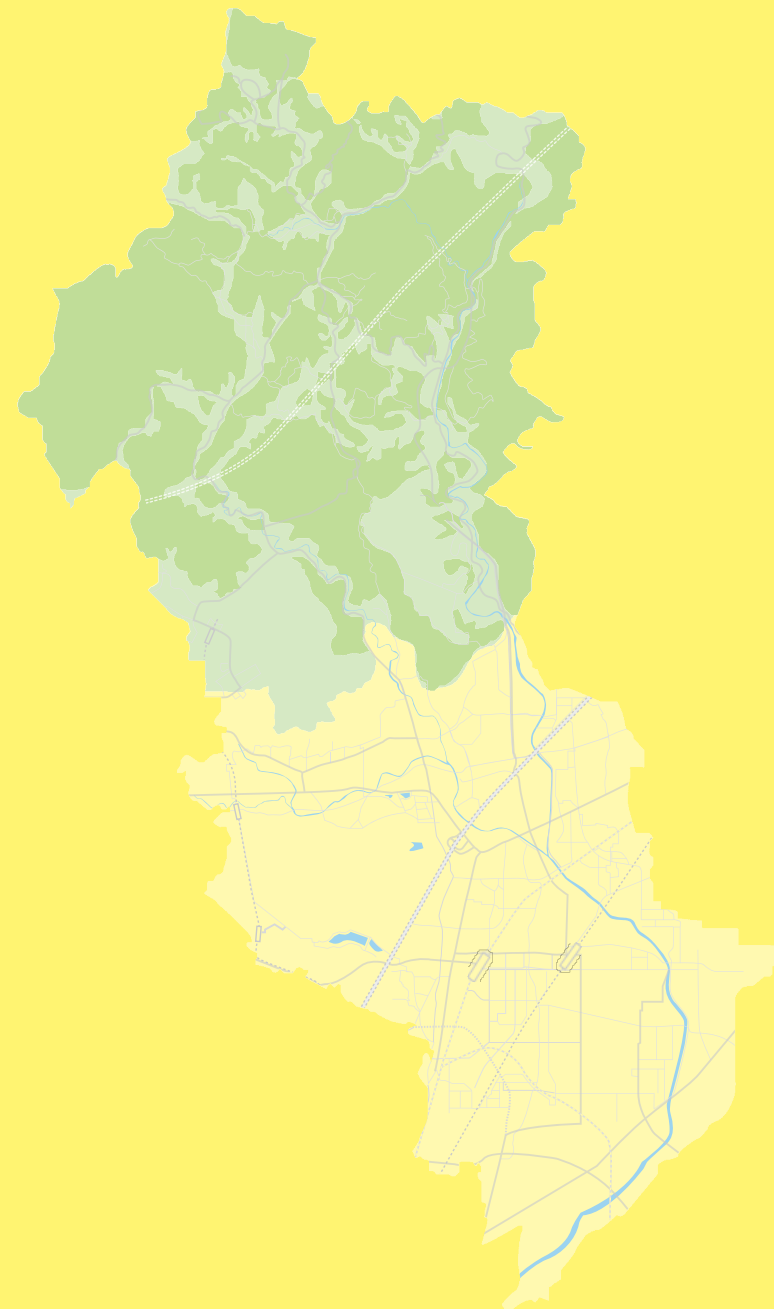


大阪府

enokujima creates osaka
enoco



いばらきの
山とまちを
つなぐ



次なる
茨木へ。



茨木市北部の課題をみんなで解決するために、
行政と地元の方々でつくるプラットフォーム。

茨木市は、大阪市や京都市へアクセスしやすく、大学、高校をはじめとする教育機関、商店街やスーパー、外食店などの商業施設も充実していることから、関西圏では「住み良いまち」「利便性の高いベッドタウン」として評価が高く、茨木市全体の人口推移は毎年、増加傾向にあります。一方、北部の山間地では、若者を中心とする人口の流出と、農林業従事者の高齢化により、産業や里山環境保全の停滞が続いています。特に問題となっているのは、山間地の「深刻な過疎化」です。茨木市全域の面積の約半分が山間地にあたりますが、市街地の人口に対して約1%という統計もあります。顕在化しているこれらの課題解決への取り組みが急務となるなか、茨木市、大阪府、茨木市観光協会、地元の市街地・山間地で暮らしている方々との連携によって、プラットフォーム（茨木市北部エリアの魅力づくりを推進するネットワーク会議）が形成され、プロジェクト「山とまちをつなぐ」は誕生しました。このプロジェクトでは、課題点の検証やアイデア提案、仕組みづくりなどを実践していきます。

身近な「自転車」というツールをうまく使って、
市街地と山間地をつなげていくアプローチ。

市街地からクルマで北へ20～30分。茨木市には、その近接した距離に、豊かな自然、美しい里山の景観、現在に伝承された歴史と文化、新鮮な農産物といった、たいへん貴重な資源が数多くあります。しかし、市街地で暮らすほとんどの方々には、それらの資源が十分認知されていないのが現状です。「山とまちをつなぐ」では、この北部地域の恵まれた環境にフォーカスをあて、さまざまな角度から「山間地の優位性」を探っていきたいと考えています。そこで、身近なアクセス手段である「自転車＝サイクリング」を使って、茨木市全域をめぐりながら、自然にふれ、人々との交流を通じて、北部地域を再発見する試みをスタートしました。本誌は、サイクリング初心者を中心とする参加者の“体験”を軸に、山間地で営みを続けておられる方々の“想い”を取材して、アウトプットすることを目的としています。この一歩が、市街地と山間地をつなげていくための可能性を発見し、課題共有をしていただける多くの人たちに確かな情報を伝え、さらに大きなプラットフォームへと成長させるきっかけになればと考えています。



「山とまちをつなぐ」の実践に向けて、 ビジョンとプロセスを共有する。

JR茨木駅からほど近い住宅街にある、築100年を超える木造邸宅をリノベーションした居心地の良い空間「GLAN FABRIQUE」。アート、デザイン、音楽などを発信するカフェ&ギャラリーで、地域のカルチャー発信拠点として積極的に活動しています。「山とまちをつなぐチーム」は、自転車ツーリングを計画するにあたって、最初のミーティングをこのカフェで行うことにしました。お店の前に確保された駐輪スペースに自転車をとめて、メンバーが集まったら会議開始です。こちらのスペースを主宰し、今回のチームメンバーでもある空間デザイナーの河上さんは、普段から自転車を移動手段にしているサイクリスト。みんなと一緒に自転車で山へ行ったら目指したい場所、会いたい人、見てみたい景色…。次々とアイデアを出していきます。「プラットフォームの会議ではどんな意見が集まったのか」「北部の課題を再認識して、自転車を使ってつなぐ方法を考えていこう」。地図を見ながら、市街地から山間地に向けてのルートやコースを導き出していくメンバーたち。「自転車が場所だけでなく、人と人もつなげられたらいいね」。そう提案したのは、茨木で自転車店を営む木原さん。「そう、“人に会いに行く”というのが、大事なキーワード。僕たちの一步はまだ小さいかもしれないけど、取り組みを多くの人に伝えることで、仲間の輪を大きくしていけたらいいな」と河上さんもうなずきます。プロジェクトの意義をみんなで共有する貴重な時間になりました。



河上友信空間設計事務所 代表
GLAN FABRIQUE inc. 主宰

かわかみ とものぶ

河上 友信さん

暮らしの中から新しい文化を見出し、育て、伝えていくという使命は、14年前の「GLAN FABRIQUE」設立以来、変わらずに持ち続けている自身の原動力です。空間デザイナーの立場から茨木全域を鳥瞰で眺めてみると、自然環境、伝統文化、人々の営みなど、多様な価値が豊富にあるけれども、各々が点在、分断されているイメージ。それらの点を線に、そして面へと思考をシフトさせていくことが重要です。茨木を自転車でつなげてみるという試みも、そのための第一段階だと捉えています。自転車という人力、アナログな方法で、自然や人と直に触れ、会話をしてみる。思考と実践のプロセスを重ねていくことによって、山とまちが、しっかりとつながり、見たこともない地域の姿が浮かび上がってきます。そのうえで、そこに住む人たちが、誇れる文化とともに豊かな暮らしの営みを持続できるようなしくみを、みんなで一緒に考えていきたいですね。



風をきって、ペダルをこいで、
“山”を全身で感じられたらいいな。

自転車に乗って、自分たちの足で街から山へ行ってみよう。「山とまちをつなぐチーム」のメンバーは阪急茨木市駅前の自転車店・くらしサイクルで集まりました。店主の木原さんは茨木市出身で、2016年に地元でショップをオープン。茨木の魅力をもっと知ってもらおうと、クロスバイクのレンタルも実施しています。「シティサイクルじゃなくてスポーツバイクを借りられるのって、なかなかないですよね!」と自転車初心者のメンバーはうれしそう。今回の自転車ツーリングは、茨木をより深く知り、北部で暮らす人たちと交流することが目的です。「自転車の良いところは、クルマの速度だと通り過ぎてしまうような発見をていねいにキャッチできること。それに、出会った人々とも交流しやすいんです」とメンバーに語る木原さん。山とまち、それぞれの文化やライフスタイルをつなぐ方法を探るため、自転車というツールをうまく使ってみよう、というのが今回の試みです。くらしサイクルのある阪急茨木市駅前から、北部の入口にあたる大阪モノレール彩都西駅付近までは片道約10km、1時間弱の道のり。山への道にはいくつもの坂が待っていますが、自転車に慣れたメンバーは「ペダルをこぐ足の裏で、茨木の地形をダイレクトに感じる“チャンス”と捉えて、がんばってみよう」とビギナーを励まします。さて、そろそろ出発の時間。「自転車のルールを守って走りましょう。キープ・レフトで!」。木原さんの呼びかけを合図にメンバーは走り出しました。



KURASHI cycle 店長

きほら よしひろ
木原 良広さん



前職から独立する際には、生まれ育った地元で開業しようというイメージはありませんでした。サイクリングという視点で、あらためて茨木市を検証してみると、市街地に平坦な道が多いことや、中間部までの高低差もゆるやかで景色も美しく、気軽に楽しめるコースがあるなど、条件が揃っていたんです。しかし、なぜか箕面や高槻に比べるとサイクルショップが少ないということもチャレンジするきっかけになりました。北部の山間地は、上級者が亀岡などに抜けていくための通過点としての位置づけ。くらしサイクルのお客さんには、ハードルが高いのですが、少しがんばれば、たくさん見どころや楽しみ方があります。北部を通過点にしておくのではなく、各地域に拠点をつくっていき、コンテンツや情報発信を行っていけば、新しいサイクリング文化をつくっていくことができるのではないのでしょうか。僕自身も、積極的に山とまちをつなぐためのアイデアや方法を提案していきたいと思います。



旧街道は、人のためにつくられた道 自転車だから出会える風景がある。

「西国街道」って知っていますか？ 茨木市内の街なかには、京都から九州へ向かうための重要な幹線道路として、古くから栄えた街道が東西に走っています。そのころの宿場「郡山宿」にあたるのが、国の史跡に指定されている「郡山宿本陣（椿の本陣）」。郡山宿本陣のまわりには、江戸時代ににぎわった歴史ある街並みがいまでも残っています。街を抜け、安威川沿いを北上して、「山とまちをつなぐチーム」はまず、この西国街道を目指します。街なかでは最近、青いペイントの自転車レーンが車道に設置されて、自転車で走りやすい環境が少しずつ整っていますが、何百年も前に整備された街道って、いまはどんな道？ すると、歴史好きのメンバーは、「街道って、人のためにつくられた道だから、自転車で走っても心地いいんだね」。名神高速道路と交差する耳原で西国街道と合流し、しばらく西へ走ると、趣のある郡山宿本陣がお出迎え。「古い道標や民家があって、街の雰囲気がガラッと変わりますね。いつも暮らしている街だけど、自転車で走ると視点が変わって新しい発見がある」と、メンバーたちはカメラを取り出して、カシャッ。絵になる風景が続きます。郡山宿本陣では当主・梶さんの案内で、築300年近い建造物を見学しながら、当時の様子を教えてくださいました。茨木の歴史の奥深さを感じながら、一行はさらに北へと向かいます。





モノレールと田畑とニュータウン 山×まちの凝縮した景色がここに。

「はじめて茨木でサイクリングを楽しむ人には、彩都西公園までがんばって走ってみてください、ってお伝えしているんです。高台から市街地を見下ろす眺めが素晴らしいですよ」。くらしサイクルの木原さんは出発前、「山とまちをつなぐチーム」のメンバーにそう伝えていました。彩都西駅のあたりはちょうど、山とまちの中間地点。片道1時間弱で、初心者にはちょうどいい距離なんだそうです。郡山宿本陣からさらに西へ進んで、豊川から大阪モノレール沿いに北上すると、長〜いすべり台のある彩都西公園が見えてきました。一帯は2004年のまちびらき以降、高層マンションも立ち並び、ショッピングモールなどの施設もどんどんできています。いまでも開発が続いており、さらに箕面市の方まで、住宅街が新たに形成されつつあります。「近代的なモノレールと、のどかな田畑、新しく開発された住宅地、そして奥には茨木の山……。なんだか、山とまちの要素をギュッと凝縮したような不思議な風景ですね」。自転車をとめて、若いファミリー層でにぎわう公園内のスロープ沿いに高台まで登ってきたメンバーたちは、街を見下ろす眺望を前にして、それぞれのペースでちょっと深呼吸。山とまちのはざままで写真を撮りながら、なにを感じ、なにを想ったのでしょうか。





さあ、ここから先は山間部、
気合い入れてがんばって登ろう。

彩都西公園から、目指す「見山の郷」までは8.5km ——。北を向くと、正面には鉢伏山がそびえています。「山へ向かう道は急勾配が多くて、ベテランのサイクリストが日ごろから走っているような厳しいコース。ちょっとしんどいけれど、みんなで助け合いながらがんばってみましょう」。自転車に乗り慣れたメンバーがそう呼びかけると、「山とまちをつなぐチーム」は地図を広げ、山間部のコースを確認してから再びペダルをこぎはじめました。列をなして少し走ると、もう里山の景色。鉢伏山が視界の横に入り、さらにペダルを進めて坂を抜けると、目の前に北摂屈指の霊峰・竜王山が待ち構えます。茨木は京都・亀岡から大阪へ抜けるルートにあるので、道中、スポーツバイクで下ってくる人たちとも何度かすれ違いました。その先、竜王山の麓にある忍頂寺まではひたすら登り！「しんどいときは、坂のキツさにあわせてギアを軽くして、できるだけ少ない力でペダルをくるくる回すようにすると楽だよ」「それでもムリだったら自転車からおりて、押して歩いてもいいからね～」と、初心者にやさしく声かけするメンバーたち。その甲斐あって、全員で目標達成！登ってきた道を振り返りながら、口にする水のおいしいこと！「遠くに棚田や古い民家が見えてきたら、自分の足で山へ来たんだ…と気持ちが高まりました。がんばってよかった～」と、メンバーみんなに笑顔がこぼれました。





農家の仕事×デザイナーの仕事

“好き”を無理なく組み合わせる暮らし方。

農業に携わる方と話をしてみたい、栽培している畑を訪ねてみたい——。「山とまちをつなぐチーム」は、地元で栽培された農産物や加工品を販売する「見山の郷」を自転車で訪れました。ここに並ぶ野菜やお米は、竜王山の麓にあたる標高300～450mの見山地区で、恵まれた自然と清らかな水に育まれています。「作っている方に会ってみるにはどうしたら…？」と聞くと、代表の原田さんが、数多くの生産者の中から「チキチキファーム」を紹介してくれました。農園を営む伊東さんに会いに行くと、有機栽培を行うビニールハウスを見学させていただけることに！中に入ると土の匂いとともに、収穫間近のホウレンソウや春菊がふわりと香ります。伊東さんは見山地区で暮らしながら「見山の郷交流施設組合」に所属して、地元特産の赤紫蘇やミニトマト「あまっこ」などを生産、見山の郷で販売しています。「お客さんが喜ぶ野菜を作っていければ」と控えめに語る伊東さんですが、実は農業の傍ら、デザイナーとしても活動中。6年間、デザイン会社に勤めたあと、20代後半で日本一周の旅へ出た伊東さん、「旅を終えてから、自然の中で働ける仕事はないか？」と考えて、ふと、農業がしたいと思うようになったんです。農業もデザインもマイペースで続けていけたら」と仕事への思いを語ります。その経歴を活かして見山の郷の名物「赤紫蘇サイダー」のデザインを手掛けたというエピソードも印象的でした。



de愛・ほっこり見山の郷
代表理事
はらだ ただのり
原田 忠節さん

チキチキファーム
いとう あつし
伊東 充志さん

伊東さん：僕が農業をはじめることができたのは、組合員の方々のおかげです。しっかりと恩返しをしなければいけないと思っています。若い世代の人たちが農業に関心を持ってもらうための情報発信やネットワークづくり、デザインの力でできる新しい提案など。自分にしかできないことを模索しながら、行動していきたいと考えています。

原田さん：見山の郷を運営している組合員は222名。そのほとんどの人たちが高齢者です。伊東くんのような若い人材、後継者を増やしていただくことが急務となっています。これらの課題に対して、地元の農家を継ごうとしている若者や、新たに農地を借りて、積極的に農業へ取り組もうとする準農家さんの助けを借りながら、新しい方法や仕組みをつくっていく必要があります。そして、見山の郷のみんなと一緒に、農業の未来を築いていくために力を尽くしていきたいと思っています。



小さなカエルたちと共に生きる菜園に 人が集まり、輪が大きくなっていった。

見山の郷からさらに北へ。チャレンジできる上り坂が続く道を2kmほど走って、美しい棚田で知られる銭原地区へ到達した「山とまちをつなぐチーム」。小高い丘の上に今回の目的地「雨蛙菜園」があります。近づく、絵本に出てきそうな雰囲気のかわいらしい鶏舎と小さな畑が見えてきました。「この土地に出会ったとき、たくさんのアマガエルがいたのが名前の由来なんです。それからアマガエルと共生できるような農業をやってみようと思い立って、手作りではじめました」。そう語るのは雨蛙菜園を営む兒玉さん。農薬や肥料を使わずに、自然の力を発揮させる自然農を実践し、鶏舎では50羽ほどの鶏を平飼いして自然卵の養鶏を行っています。「市販の配合飼料を使わずに育てた卵です。卵アレルギーがあってもおいしく食べることができると言ってくれる方がいて、いつも買いに来てくれるんですよ」と、自慢の卵を語る兒玉さんはうれしそう。その笑顔に、メンバーにも笑みがこぼれます。さらに、卵を買ってくれた方には自家焙煎のコーヒーを無料で提供。コーヒーで一息つきながらお話ししている最中にも、遠方から卵を求めに来た人やご近所さんが足をとめ、自然とくつろいでいきます。兒玉さんは、「ゆったり、のんびり日々を過ごしていければいい」と言います。やさしい人柄とおいしい卵、そして、ホッと落ち着ける時間を求めて、丘の上の小さな菜園には多くの人が集まっているようです。人と人をゆるやかにつなぐ農業のヒントが、ここにありました。



雨蛙菜園

こ だ ま し げ な り

兒玉 重也さん

長年の会社勤務で体調を崩し、休職中に「ゆっくりとした暮らし」を考えていたところ、この土地と出会いました。ここでは自分の好きなことだけをやる。それだけを決めて、手探りで菜園や養鶏などをはじめました。自然農に関しても、すべてが独学。これが、とても楽しかった。あつという間に体調も良くなり、思い切って退職することになりました。それからの4年間は、はじめたころと変わることなく、ゆっくりと時間をかけ、日々少しずつ手を加えてくうちに、いまのような「場所」に育っていきました。卵を買いに来てくださる方々と、もっとお話がしたいからテラスをつくったり、コーヒーでおもてなしをしたり。そうしているうちに、コミュニティが生まれ、自然環境や地域の課題について一緒に考えていく仲間たちと出会うことができました。自分の好きなことが誰かの役に立つことができるかもしれない。こんなにうれしいことはないですね。今後も、次代につながる地域づくりに参画していきたいと思います。



山のなかのサイクルステーションが 楽しみ方をぐんと広げてくれる。

里山の景色を楽しみながらアップダウンのある道を進むうち、「そろそろ休憩したいかも」という声が出てきたころ、「忍頂寺スポーツ公園 竜王山荘」で休憩をとることにしました。竜王山荘は喫茶やレストランを備え、スポーツ・レクリエーションや宿泊、研修などを受け入れている市民のための施設です。サイクリストに向けたサービスを積極的に提供していて、ロビースペースで自由に休憩ができるだけでなく、シャワーと更衣室も開放。予約をすれば宿泊もできます。「山とまちをつなぐチーム」は、ゆったりとくつろげる日当たりの良いロビースペースで足をのばして、各自しばしのブレイクタイム。ソファでお茶を飲んだり、アイスクリームを食べたり、軽く足のストレッチをしたり。「ここを拠点にすれば、いろんな楽しみ方ができるってことだね!」「クルマでここまで来てから、周辺でサイクリングを楽しんでみるとか」「逆に、自転車で来て一泊してから、翌日に近隣を散策してもいいかも」「それもいいなあ」。そんな調子で、リフレッシュしたメンバーからサイクリングのアイデアがどんどん湧いてきました。竜王山荘のスタッフからは、周辺のおすすめスポットとして、キリシタン遺跡などがある「キリシタン自然歩道」、あべのハルカスまで望む「竜王山頂の展望台」などの散策スポットも教えていただきました。山間部の見どころを満喫するのに便利な立地にある、自転車フレンドリーな施設に出会えて、山とまちをつなぐおもしろいプランが生まれそうです。



忍頂寺スポーツ公園・竜王山荘 所長

たかしま ひろみ

高島 傳實さん

自転車で使って市街地と山間地をつなぐために「忍頂寺ロードバイクステーション」という構想を提案させていただきました。現在、竜王山荘ラウンジのロビー、更衣室やシャワーを無料で使っていただくことができます。将来的には、ロードバイクや電動アシスト自転車のレンタル、市街地からの送迎車運行などの展開も検討しています。また、地元農家さんと連携しての農業体験やホテルの鑑賞ツアーなどといったコンテンツづくりも進めていきたいと考えています。茨木市北部は、自然環境、歴史文化、おいしい農産物など、豊かな資産に恵まれています。市街地の方々には、まだまだ認知されていません。私たちの施設を拠点として活用することで、より深く山間地を楽しんでいただき、サイクリストをはじめ、さまざまな方々の意見やアイデアを吸収し、フィードバックさせていくことで、情報発信基地としての役割を担っていききたいと思います。



伝統農法をしっかりと守り継ぎ、 茨木の農業を未来へつないでいく。

茨木の特産品「三島独活^{みしまうど}」は江戸時代からの伝統農法によって継承されてきました。しかし、現在の生産者は北部・千提寺地区にある一軒の農家だけ。それが、今回訪ねた「千提寺farm.」の中井さんご夫婦です。収穫時期は早春。タイミングよく、収穫を見学させていただけることに。独活小屋に入ってみた「山とまちをつなぐチーム」はびっくり。中をのぞいても、独活は見えません。「独活の上に7層の藁と干し草をミルフィーユ状に重ねて覆い、収穫する直前まで一切外気に触れさせないことでアクが少ない味わいに育つんです」と中井さん。干し草をそっと動かし、慎重に取り出した三島独活は透明感があり、輝いているよう。採れたてを試食すると、「シャキシャキ感があって、甘くておいしい!!」とはじめての味わいに歓声が上がります。その様子を見守る中井さんに「伝統農法を受け継ぐのは、大変でしたか?」とメンバーが聞くと、「高い技術を伝承することが、本当に難しいです」。それでもチャレンジを続ける理由は?「農業が絶対に必要な北部地域で、三島独活なら事業化できると確信したからです」。千提寺farm.では“独りじゃ活きられへん”というコンセプトで三島独活のブランド化を進めています。「地域、お客さん、料理人の方々……たくさんの人に支えられ、活かされていることが三島独活の最大の魅力だと思っています」という言葉が、メンバーに強く響いてきました。



千提寺farm.

なか い だいすけ なか い ゆうき
中井 大介さん 中井 優紀さん

私たち夫婦は4年前、この土地に住むことを決め、農業をはじめました。暮らしを続けていくうちに、実感したことや理解できたことが数えきれないくらいにあります。地元農家の方々が、何代にも渡って育んできた土地への愛情や誇り、日々の営みによって守られていく自然環境、人と人が支え合って生み出される文化。私たち若い世代の使命は、この豊かな地域の資産を決して絶やさない、そして、次の世代に、しっかりと継承していくことだと考えています。茨木市北部では、人口減少による農林業の後継者不足、それに伴う里山保全が大きな課題です。その解決に向けて、地域の本当の良さを多くの人に知ってもらい、一緒になってアイデアを出し合える人々が増えてくれることを望んでいます。そのために、まずは自分たちから一步一步、地に足のついた活動持续开展、地域の本質的な価値を見極めていきながら、さらに新しい風を送り込んでいく役割を担っていきたいと思います。



知る人ぞ知るピッツェリアが最北端に！ サイクリストに人気の理由はなんだろう。

美しい棚田の景色がいまも残り、初夏にはホテルも飛び交うほど豊かな自然に恵まれた銭原地区。この茨木市最北端エリアにある「双子家ピザ」は、グルメなサイクリストが集まるお店として知られています。評判のピザを目当てに長〜い坂を登ってたどり着いた「山とまちをつなぐチーム」を迎えてくれたのは、バイクラック。自転車をとめ、築100年以上の古民家を改装した店内へ入ると、ピザ窯からのたまらない香りに包まれます。「ピザに使っているのは銭原地区で採れた新鮮な野菜と、長期低温発酵させた生地。石窯で1枚ずついいねいに焼き上げるので、くつろいでお待ちくださいね」と店主の柳本さん。本場ナポリの味と製法にこだわり、ピザ生地専用の小麦粉もイタリア産を使用するほど。メンバーはマルゲリータやアボカドピザ、地元猟師が獲った猪肉を使ったビスマルク風「シシマルク」などを次々とオーダーしていきます。すると、柳本さんが慣れた手つきで生地をのばし、具材をのせて石窯へ。庭のテーブルへ焼きたてピザが運ばれてくると、みんなの手がピザに集まって、次の瞬間には……「おいしい〜!!」。傾斜のきつい坂道を登ってお腹がペコペコだったこともあり、何枚もオーダーしたピザをあっという間に完食。薪の香りに包まれながら、庭のテーブルで仲間とピザをほおぼる楽しさといったら！「このおいしいごほうびがあるから、長い坂もがんばって登れるんだね」「もしかして、イタリアのサイクリストって、こんな贅沢な楽しみが日常的!？」なんて会話が弾んでいました。



双子家ピザ

やなぎもと ひでし

柳本 秀史さん

オープンして3年目になりますが、口コミやSNSなどで徐々に伝わっていき、たくさんの方々が茨木市の最北までピザを食べに来られています。最近では、サイクリストさんのグルメライドの目的地としてよくご利用いただいています。私自身は、市街地に住みながら山間地まで通っているのですが、クルマで20〜30分の距離に、これほど豊かな自然が広がっているという「茨木市の特性」があまり知られていないように思います。双子家ピザに来られて、はじめて気づく方も多い。この恵まれたロケーションを上手く活用するためのアイデアや仕組みづくりが必要ではないでしょうか。地元で農家をされている方が連携して茨木産ブランドを育てたり、市街地の人たちと一緒に環境教育に取り組んでいくなど、さまざまな可能性を秘めていると思います。自分の軸足を定め、北部の各地域と茨木市全体のバランスをしっかりと見つめながら、新しい提案と実践をしていきたいと考えています。



茨木の山の間伐材を役立てて 自転車フレンドリーな拠点づくりを。

スポーツバイクをとめるとき、便利なのが「バイクラック」。自転車のサドルを引っ掛けて駐輪するシンプルな構造で、自転車で訪れやすい拠点づくりを行うための必須アイテムです。そんなバイクラックを活用して、茨木にもサイクルスポットを増やそう！という取り組みが現在、泉原地区にある「茨木市里山センター」で行われています。この施設は、里山と森林保全に取り組む地元ボランティア団体の活動拠点。旧春日丘高校泉原分校を利活用した、懐かしさを感じる空間に、センターを訪れた「山とまちをつなぐチーム」は心を刺激された様子。山に囲まれた旧グラウンドでバーベキューができたり、自然工作教室を定期的で開催していたりと、市民が楽しめる場を提供しています。バイクラックは、「山とまちをつなぐ」プロジェクトの一環で、山の保全のために間伐した間伐材を使って、森林ボランティアの方々が制作中とのこと。木工技術スタッフの行田さんの案内でラック制作の様子を見学させていただきました。「間伐された丸太を製材し、平削りをするプレーナーをかけて、設計図をもとに断裁加工して組み立てます。間伐材が茨木のサイクリング文化の普及に役立ってくれるとうれしいですね」。そう笑顔で語る行田さん。今後、「山とまちをつなぐ」プロジェクトに沿って、茨木市里山センターよりバイクラックを提供していただくことに。山間部で自転車を楽しむ人が増えるきっかけになりそうです。



茨木市里山センター・木工技術スタッフ

ゆきだ かんじょう
行田 完城さん



バイクラックづくりは、地元森林ボランティアの方々と里山センター木工技術スタッフの協力によって進めています。私は、生まれ育ったところが山間部ということもあり、すぐく山が好きなんです。肌で感じる山の空気に惹かれる。そんな私の実感としても茨木市の山は、本当に素晴らしく、大切にしていきたいと思っています。里山センターは、ボランティアの方々が森林保全活動を行うための拠点です。山主さんが所有する森林の手入れをはじめ、治水や防災に関する情報交換、里山での楽しみ方を普及するなど、日々、地道な活動を続けています。バイクラックは、それらの方々が、茨木の山を守るために間伐してきた木材を活用して制作しました。山とまちを自転車ですつないでいくプロジェクトの一環として、山間地のサイクルスポットが増えていくとともに、このバイクラックから山の大切さを感じ、自然環境について「想い」を共有していただけたら、とてもうれしいですね。



自分で考え、実践する自由な発想が “農業”の新しいスタイルをつくっていく。

「“清阪”という地名どおりの坂だった!」。自転車で登るには厳しい急な坂を、自転車を押しながら歩いていくメンバーたち。木漏れ日のなか、細道をしばらく進むと、四方を山に囲まれた“隠れ里”のような場所にたどり着きました。そこが、茨木市北部の清阪地区で循環型農業を行う「清阪terrace」です。「坂、きつかったでしょ?よく来ましたね～」と笑顔で迎えてくれたのは、こちらの農園を営む横峯さん。木立の中、ちょっと一息ついてから、「平飼い」という育て方を行う鶏舎を見学させていただきました。たくさんのニワトリたちが過ごしている鶏舎の中に入ると、「わ～、すごく元気!みんな走り回ってる!」。驚くメンバーに横峯さんは、「自然に近い環境で育てています。自由に動き、太陽の光を浴びることで、ストレスなく育ってくれるんですよ」と解説してくれます。ニワトリたちの餌にも工夫があり、竹の粉を発酵させたものや腐葉土や野菜くず、魚介類などを中心にした自然飼料を与えることで健康的に育ち、おいしい自然卵を産んでくれるのだそうです。さらに、横峯さんの試みは養鶏だけではありません。「ヤギを飼ったり、バーベキューをしたり、ワークショップをしたり…。いろんな人に開かれた場所として活用できたらいいな、と考えています」。実際、棚田や畑を仲間たちとシェアするなど、枠にとらわれない自由な発想で農業を営んでいる姿が印象的でした。新しい農業のあり方についてヒントをもらったメンバーたち。新鮮な驚きと湧き上がるアイデアで頭をいっぱいにしなが、勢いよく山道を下っていきました。



清阪terrace
よこみね てつや
横峯 哲也さん

前職でも農業関連の仕事に就いていたのですが、僕が目指していた農業は「自産自消」。昔の農家は、畑を耕すために牛を必要とし、卵を食べるために鶏を飼っていました。餌は農地の雑草を与え、糞を肥料として活用する。自分たちの営みに見合ったスケールで、限りなく無駄のないカタチ。外から肥料や堆肥を持ち込まずに、自然の中で循環していく農業をやってみたかったんです。そんな時に、この地と出会い、友だちと一緒にお米づくりからはじめました。少しは知識があったものの素人同然ですから、毎日が試行錯誤の連続。だけど、マニュアルに頼らず、自分で考えて実践していくのは、たとえ失敗しても楽しい。清阪terraceは、休日だけ畑仕事をしにくる人など数名でシェアしながら運営しています。「自分で食べるものを自分でつくる」という体験を通じて、社会への新しい発見につながっていく。そんなフィールドに成長していったらいいなと思っています。



自転車をとめて溪流沿いを歩き、 非日常な景色の中で“山とまち”を考える。

山をもっと満喫するには、サイクリングとハイキング、どちらも楽しむ「ライド&ハイク」をやってみよう。歩いて散策するのにおすすめのスポットを安威川上流漁業協同組合の角野さんにアドバイスしてもらった「山とまちをつなぐチーム」は、竜王山荘に自転車をとめて、少し足をのばしてみることにしました。まず向かったのは、竜王山の山頂にある木造の展望台。竜王山荘から東へ30分ほど登っていくと到達します。茨木の街並みの先に大阪平野が広がる眺望が素晴らしく、「目の前に大阪キタのスカイビル、その先にあべのハルクスも見える!この景色は山登りのご褒美だね」とメンバーはうれしそう。続いて向かったのは、竜王山の東に流れる下音羽川。山道を降りて、のどかな遊歩道を散策するうち、せせらぎの音が徐々に近づいて、マスやアマゴ釣りが楽しめる清流にたどりつきました。「溪流の近くまで行ってみよう」。アウトドア好きのメンバーがそう提案すると、みんなで坂を降りていきます。「わっ、川の水の透明度がすごい!」「茨木に、こんなに透き通った水があったなんて」と、メンバーたちは驚きを隠せません。そのほか、約290年前に造られた「深山（権内）水路」があったり、大阪の箕面山から東京の高尾山をつなぐ約1,700kmの「東海自然歩道」の一部が通っていたりと、周辺には魅力的なスポットが点在しています。「春と夏には溪流釣りやBBQをする人でにぎわうんだって。僕らもやってみる?」。深い森での新鮮な自然体験を経て、山を満喫するアイデアがさらに浮かんだようです。



安威川上流漁業協同組合 代表理事組合長
すみの かずお
角野 一雄さん

茨木市北部から流れる下音羽川は、車作の北で安威川と合流します。その合流点から川沿いの山道を登っていくと、山深い景色が続き、川に降りて溪流で遊んだり、四季折々の美しい自然を体験することができます。その先には、約290年前に村の庄屋だった畑中権内が、車作地区へ農業用水を届けるために独力で造った「深山水路（通称:権内水路）」があります。水路沿いに、休憩ができる広場や遊歩道があり、川のせせらぎを聞きながらの森林浴を楽しめる方も多くですね。さらに上を目指していくと竜王山の頂上に到着。ここには展望台があり、市街地はもちろん、大阪市内までも見渡すことができます。そこから東海自然歩道を伝いながら下山すると「竜王山荘」です。私自身も、このコースが好きで、日頃からよく散策をしています。この素晴らしい山と川の景観を残していく、茨木市の資産として守っていくための活動を続けていきたいと思います。



山への自転車ツーリングを通して あらためて感じた茨木の「広さ」。

そろそろ夕暮れが近づいてきました。茨木市北部の山間地をぐるりとめぐるってきた「山とまちをつなぐチーム」のメンバーは、ツーリングの締めくりに山手台から茨木の市街地を見下ろしています。西陽に照らされながら振り返って思い出すのは、これまで出会った人との交流、山のできごと、美しい里山の景色——。市街地から山間地にかけて自転車で走ることで、五感をフル活用して茨木ならではの資源を再発見し、サイクリングを通して自然を満喫できました。「あらためて、スタート地点の街なかに戻ってくると、感慨深いね」「茨木市ってこんなに広いんだ、こんなにもおもしろいんだって、今回のツーリングがなかったら知らないままだったかも」「足は疲れたけれど、これほど達成感があるのはひさびさ。みんなががんばって坂道を登ってよかった〜」。街からは見えていなかった山の魅力に気づき、充実した表情で語り合うメンバーたち。暗くなりかけたころ、ライトの灯る「くらしサイクル」へ戻ってきて、ゴール！今回のツーリングはおしまいです。自転車をとめて中に入ると、「みんな、おつかれさま」と、店主の木原さんが淹れたコーヒーをみんなにふるまってくれました。コーヒーのあたたかさに、メンバーの疲れもほぐれていきます。「自転車で山とまちをつなげるために、なにができるか？まず、なにをすべきか？」。さまざまな課題解決のヒントを山から街へと持ち帰ってきて、次に向けての取り組みがゆるやかに はじまっていきそうです。

